

膵がんは、発見からの5年生存率が7パーセントと極めて低く、画期的な新しい治療法の開発が望まれている。島根大学医学部には、膵がん撲滅を目指し、基礎研究・臨床研究を集学的に行い、新しい治療法の開発を研究するトップランナーたちがいる。

3 話 連 載

第1話

臨床医から基礎研究者へ

夢中で追いかける

生化学講座（病態生化学）教授 浦野 健（うらの たけし）は昭和33年、長崎大学医学部附属病院で外科医をしていた父の下に生まれ、自然と医師を志した。長崎大学医学部に進学後は、医学の勉強の傍ら、寝ても覚めても硬式テニス。真っ黒になって、夢中でボールを追いかける毎日だった。

卒業後、浦野は、研修医として長崎大学医学部の外科の医局に所属した。ここでは、1年ごとの派遣先の病院ローテーションを“じゃんけん”で決めていた。強運体質というのだろうか、浦野は、琉球大学、長崎市民病院、浜松医療センターなど手術症例数の多い病院での勤務が続いていた。とうとう、同級生から「お前はいいところばかり行きすぎだ。平戸で田んぼでも耕してこい。」と言われ、「いいよ。」と、彼は二つ返事で承諾した。

腕利きの外科医

そんな経緯で、昭和62年、平戸市立紐差（ひもさし）病院（現平戸市民病院）への派遣が決まった。平戸は同級生の言ったとおり、自然に囲まれたのどかなよい島だった。

紐差病院では病院長・研修医を含め、外科医は3人だった。浦野は高度外傷、救命救急を2年間、24時間体制で担当した。

「必ず助ける!救急車はすべて僕が担当する。僕の目の前を救急車に素通りさせるな!」

病院内に住み込み、当直はほぼ毎日、緊急手術も数多く行った。

助走期間

救急車が来ない日は勉強に打ち込んだ。平戸はその点、誘惑もなく非常によい環境であった。ちょうどその頃、アメリカでは“がん遺伝子”が次々と発見されていた。“がん遺伝子”を扱う分子生物学が未来への大きなうねりとして彼の中に流れ込み、「アメリカで、がん遺伝子の研究がしたい」と思うようになった。彼はいつか来るその日に備えて、給料を留学資金として貯めていった。

紐差病院の小児科には長崎大学から3か月のローテーションで医師が来ていた。小児科に派遣されるのは、留学を控えているか、留学後、診療に慣れるために、ここで診療を行う医師であった。

浦野は、留学を終えて帰ってきた先輩医師からよく尋ねられた。

「お前英語できるのか。」「できません。」

「研究やったことあるか。」「ないです。」

「長崎大学に研究ができる若い良い教授が来たので、そこでまず勉強したらどうだ。」

何人もの先輩医師が同じ名前を挙げた。その人にぜひ会ってみたいと思った。

紐差病院の2年目は、大学へ通うことを許された。大学院入学に備えて、勉強のため、車を買った。彼は週1回、車で150km、3時間半かけて平戸から長崎市へ向かった。ほぼ毎週である。大学で行われる抄読会やディスカッションに夕方5時から参加した。終わるのは夜中の1時、2時という白熱ぶりだった。この勉強会では知識ばかりではなく、かけがえのない大きなものが得られた。

浦野は紐差病院での勤務を終え、平成元年長崎大学大学院に入学した。もちろん、多くの仲間たちと日夜議論を闘わせながら“がん”について研究をし、博士の学位を取得した。そして平成5年、国際ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムの支援を受け、米国タフツ大学 生化学教室へ博士研究員として派遣されることになった。



生化学講座（病態生化学）
教授 浦野 健

（次回予告）

満を持してアメリカ留学へ臨む浦野。現在の彼の研究の萌芽はここから始まる。